

土の中からの話

坂口安吾

青空文庫

私は子供のとき新聞紙をまたいで親父に叱られた。尊い人の写真なども載るものだから、と親父の理窟であるが、親父自身そう思いこんでいたにしても実際はそうではないので、私の親父は商売が新聞記者なのだから、新聞紙にも自分のいのちを感じていたに相違ない。誰しも自分の商売に就てはそうなので、私のようなだらしない人間でも原稿用紙だけは身体の一部のように大切にいたわる。先日徹夜して小説を書きあげたら変に心臓がドキドキして息苦しくなってきたので、書きあげた五十枚ほどの小説を胸にあててみた。夏のことですぐいからふと紙のつめたさを胸に押し当ててみる気持になっただけのことであるが、心臓の上へ小説

を押し当てていると、私はだらしなくセンチメンタルになって、なつかしきで全てが一つに溶けてゆくような気持になった。理窟ではないので、自分の仕事の愛情はそういうものだ。もっと尤も書きあげて一週間もたつと、今度は見るのが怖いような気持になり、題名を思いだしてもゾツとするようになってしまう。

あるとき友達の画家が、談たまたま手紙一般より恋文のことに至り、御婦人に宛てる手紙だけは原稿用紙は使わない、レター・ペーパーを用いる、原稿用紙は下書きにすぎないから、と言う。私は初め彼の言葉が理解できなかつたほどだ。これも商売の差だけのことで外に意味はない。私にとって原稿用紙はいのちの籠こもつたものであり、レター・ペーパーなどはオモチャでしかない。

商人が自分の商品に愛着を感じるかどうか、もとより愛着はあるであろうが、商うということと、作るということとは別で、作る者の愛着は又別だ。そういう中で、農民というものはやっぱり我々同様、作者なのであるが、我々の原稿用紙に当るのがつまりあの人々では土に当るわけで、然し原稿用紙自体は思索することすいこうも推敲することもないので比べると、土自体には発育の力も具わっているのです、我々の原稿用紙に更に頭脳や心臓の一かけらを交えた程度にこれは親密度の深いものであるらしい。その上に年々の歴史まであり、否、自分の年々の歴史のみではなく、父母の、その又父母の、遠い祖先の歴史まで同じ土にこもっているのであるから、土と農民というものは、原稿用紙と私との関係などより

はるかに深刻なものに相違ない。尤も我々の原稿用紙もいったんこれに小説が書き綴つづられたときには、これは又農民の土にもまさるいのちが籠るのであるが、我々の小説は一応無限であり、又明日の又来年の小説が有りうるのに比べて土はもつとかけがえのない意味があり、軽妙なところがなくて鈍重な重量がこもっている。

土と農民との関係は大化改新以来今日まで殆ど変化というものがなく続いており、土地の国有が行われ、農民が土の所有権と分離して単に耕作する労働者とならない限り、この関係に本質的な変化は起らぬ。農の根本は農民の土への愛着によるもので、土地の私有を離れて農業は考えられぬ、というのは過去と現在の慣習的な生活感情に捉われすぎているので、むしろ土地の私有という

ことが改まらぬ限り農村に本質的な変化や進化が起らないということが考えられるほどだ。

農村自体の生活感情や考えの在り方などが、たとえそれがどのように根強く見えようとも、その根強さのために正しいものなの絶対のものだのと考えたら大間違いだ。江戸時代の田中丘隅という農政家が農民の頑^{がんめい}迷な保守性を嘆じて「正法のことといへども新規のことはたやすく得心せず、其国風其他ならはしに浸みて他の流を用ひず」と言い、更に嘆じて「家業の耕作、田地のこしらへ、苗代より始めて一切の種物下し様に至るまで、ただ古来より仕来る事を用ひて、善といへども、悪を改めず」と嘆息している。

このことは遠い古代からすでにそうで、平安朝の昔、大伴今人という国守が山を穿うがつて大渠だいきよをひらいたとき、百姓はこれを見無謀な工事だといって嗷ごうごう々と批難したが、工事を終りその甚大な利益を見るに及んで嘆賞して伴渠と名づけて徳をたたえたといい。又、淳和天皇の頃、美濃の国守の藤原高房という人があつて、安八郡のさる池の堤がこわれて水がたまらず灌漑かんがいの用を果しておらぬのを見て、修築を企てた。すると土民は口をそろえて、この池は神様が水を嫌っているのだから水を溜めない方がいいのだと騒ぎだしたが、神様が怒つて殺すというなら俺はいつでも殺されてやるさ、と高房は断乎として堤を築かせたところ、工事終つて灌漑の便利に驚いた土民は改めて嘆賞したという。平安朝の

昔からこの式で、今に至るもなお、農民は常に今居る現実を善とし真とし美とし、これを改良することを不善とする。改良の精神自体を不善不逞ふていにして良俗に反するものと反感をいだく始末なのである。

大化改新のとき農民全部に口分田というものを与えた。つまり公平に田畑を与えたわけであるが、良田も悪田も同じに差別なしに税をとる。元々田畑を与えた理由が大地主の勢力をそぐためであり皇室の収入のためであつて農民自体の生活の向上ということが考えられていたわけではないから、税が甚だ重い。今日の供出と同じことで農民は不平であり、大いに隠匿いんとくまい米もやりたいたであろうが、今日と違ふところは上からの天下り命令が絶対で人民の

権利だの官吏横暴などと法規を楯にする手がないから、泣く子と地頭にはかたれないということになつて、逃亡とか浮浪ということをやる。尤も本当は逃げずに戸籍だけごまかすという手もあつたに相違ないが、奈良朝だの平安朝の今日残存する戸籍簿に働き盛りの男子が甚しく少いのは名高い話で、つまり逃亡しているか、戸籍をごまかしているのである。逃亡の理由にも色々とあつて、**国守の苛斂誅求**をさけるだけなら隣国へ逃げてよい。こかれんちゆうきゆうういう逃亡は走り百姓といつて中世以降徳川時代までつづいていた。けれども税そのものを逃げるといふ手段もあつて、口分田は税をとられるが荘園は国司不入の地であるから自分の田畑を逃げて荘園へ流れこむ。又は自分の土地を荘園へ寄進して脱税をはかると

いう風潮が全国一般のことになったから、国有の土地が減少して寺領とか権門勢家に所属する荘園がふとつて、貴族や寺院は富み栄えて貴族時代を現出する。ところが貴族が都の花にうかれて地方管理を地方の土豪に委任しておくうちに、荘園の実権が土豪の手にうつつて武家が興り、貴族は凋落ちようらくするに至る。

表向きの立役者は皇室、寺院、貴族、武家の如くであるが、一皮めくってみると、そうではない。実は農民の脱税行為が全国しめし合せたように流行のあげく国有地が減少して貴族がふとり、ついで今度は貴族へ税を収めるのが厭だというので管理の土豪の支配をよろこび、土豪を領主化する風潮が下から起つておのずと権力が武家に移ってきたので、実際の変転を動かしている原動力

は農民の損得勘定だ。

日本歴史を動かしたものは農民だと云つても当の農民は納得しないに相違なく、農民個人というものはただ虐げしいたられており、娘や女房を売り、はては自分の身体まで牛馬なみに売りにだすような悲しい思いをしていることの方が多いのだが、その農民の個人々々の損得観念、損得勘定の合計が日本の歴史を動かしている。いじめられ通しの農民には、上からの虐待に応ずるには法規の目をくぐるという狡こウかつ猾の手しか対処の法がないので、自分が悪いことをしても、俺が悪いのではない、人が悪くさせるのだと言う。何でも人のせいにして、自主的に考え、自分で責任をとると言う考え方が欠けており、だまされた、とか、だまされるな、と云つ

て、思考の中心が自我になく、その代り、いわば思考の中心点が自我の「損得」に存している。自分の損得がだまされたり、だまされなかったり、得になるものは良く、損になるものは悪い。損得の鬼だ。これが奈良朝の昔から今に至る一貫した農村の性格だ。

いつだったか、結城哀草果氏の随筆で読んだ話だが、氏の村のAという農民が山へ仕事に行くと林の中に誰だか首をくくってブラ下っているものがある。別に心にもとめず一日の仕事を終えて帰ってくると、その翌日だか何日か後だか今度はBという農民がやっぱり山へ仕事に行つて例のぶら下つた首くくりを見てこれも気にもとめず一日の仕事を終えて帰ってくる。ある日二人が会つて、山の仕事の話をしているうちに、ふと首くくりを思いだして、

ああ、そうそうあんたもあれを見たのか、と語りあって、又、それなり忘れてしまったという。結城哀草果氏は、この話を、農民が世事にこだわらず、天地自然にとけこんで、のんびりしている例として、又、そういう思想的な扱い方をしているのである。

農村の文化人というものは、全国おしなべて大概こういう突拍子もない考え方で農村を愛しているのが普通で、自分自身農村自身じゆんぼくの悪に就ては生来の色盲で、そして農村は淳朴じゆんぼくだなどと云って、疑ることなどは金輪際ない。

奈良朝の昔から農村の排他思想というものはひどいもので、信頼するのは部落の者ばかり、たまたま旅人が行きくれても泊めてはやらす、死んだりすると、連れの旅人に屍体を担がせて村境へ

捨てさせて、連れの旅人も蹴とばすように追いだしてしまつたものだ。

さわらぬ神にたたりなし、と称して、山の林に首くくりがブラブラしていても、もしや生き返りやしないか、下して人工呼吸でもしてやろうなどとは考えずに、まつさきに考えるのは、よけいな事にかかり合つて迷惑が身に及んではつまらない、ということだ。都会の人間なら、下して助けようとしてみるか、怖くなつて逃げだして申告するのだが、怖くても逃げて申告するのが損のようであるので、怖いのを我慢の上で一日の仕事をすましてきて素知らぬ顔をしている。

越後の農村の諺に、女が二人会つて一時間話をすると五臓六腑

までさらけて見せてしまう、というのがあつたそうだが、農村の女は自分達が正直で五臓六腑までさらけて見せたつもりで、本当にそう思いこんでいるのだから始末が悪い。女が二人会えば如何にも本音を吐いたように真実めかして実は化かし合うものだ、というのは我々の方の諺ことわざなのだが、万事につけてこういう風にあべこべで、本人達が自分自身の善良さを信じて疑うことを知らないのが、何よりの困り物なのである。

なんでもかでも自分たちは善良で、人をだますことはないと思つている。そのくせ、農村に於ける訴訟そしやう事件といえは全国大概似たようなもので、親友とか縁者から田畑とか金をかりて心安だてに証文を渡さなかつたのをよいことに、借りた覚えはないとい

って返却せずもともと自分の物だと主張するようになったり、隣の畑の境界の垣を一寸二寸ずつ動かして目に余るひろげ方をして訴訟になるといふ類いで、親友でも隣人でも隙さえあれば裏切る。証文とか垣根とか具体的なものが何より必要なのは農村なので、実際はこれほど物質化されている精神はなく、実にただもう徹頭徹尾己れの損得観念だけだ。そのくせそれを自覚せず、自分達は非常に愛他的な献身的な精神的な生き方をしており、いつもただ人のために損をし、人に虐められるばかりだと思ひこんでいる。

伊太利喜劇というものがあつて、これは日本のにわかのように登場人物も話の筋もあらかたきまつたもので、例のピエロだのパ

ンタロンのでてくる芝居だ。可愛い女の子がコロンビーヌ。意地わるの男がアルカンなどときまつていて、ピエロはコロンビーヌにベタ惚れなのだがふられ通しで、色恋に限らず、何でもやることとがドジで星のめぐり合せが悪くて、年百年中わが身の運命のつたなさを嘆いているのである。ところが舶来はくらいの芝居は情け容ようし赦やがないもので、日本の勸善懲惡かんぜんちようあくみたいいにピエロも末はめでたしなどということとは間違つても有り得ず、ヤツツケ放題にヤツツケられ、悲しい上にも悲しい思いをさせられるばかりだ。そのくせ狡ずるいといえはこの上もなく狡い奴で、主人の眼や人目がなければチヨロまかしてばかりいる。

こういう戯画化された典型的人物が日本の農村に就ても存在し

ていてくれれば、まだ日本農村の精神内容は豊かに、ひろく、そして真実の魂の悲喜に近づくのだが、農村は淳朴だと我も人もきめてかかつて、供出をださないことまで正義化して、他人の悪いせいだという。勿論、他人も悪い。他人も悪いし、自分も悪い。これは古今の真理なのだが、日本の農村だけは、他人だけ悪くて、自分は悪くない。

今昔物語にこういう話がある。

信濃の国司に藤原陳忠という男があつたが、任を果して京へ帰ることとなり深山を越えて行くと、懸かけはし橋の上で馬が足をすべらして諸共に谷底へ落ちてしまった。この谷がどれぐらいの深さだか、木の枝につかまって覗きこんでも底は暗闇で深さの見当もつ

かないというところで、崖の両側から大木の枝や灌木かんぼくの小枝がさしかけて、落ちたが最後アツと一声落ちて行く姿すらも見えはせぬ。もとより落ちて命のあろう筈はないが、せめて屍体でもなんとかしたいと思つても、この谷の深さではどうしてよいやら、多勢の郎党どもうろろう相談していると、谷底の方からほのかに人の呼び声がするようだ。はてな、殿は生きておられるのじやないか、それ呼べ、というので呼んでみると、谷底からたしかに返事がきこえてきて、旅籠はたごに縄なわを長くつけて下してよこせと言う。さては生きておられる、それ旅籠を下して差上げると各自縄紐を出しあつて長い縄をつくり籠を下してゆくと、もうじき縄が足りなくなるというところで留つて動かなくなつたから、やれやれど

うやら間に合ったらしい、下から合図がないものかと首を長くして待つうちに、下から声がとどいて引上げろ、という。それこの引上げが大事なところ、あせらぬように用心しろと戒め合つてそろりそろりと引上げるが、人間が乗つたにしてはどうも手応えが軽すぎる。どうも、おかしい。なにか間違いがあるんじゃないか。いや、殿も用心して木の枝から枝をつかまりたぐつていられるので重さがないのだろう、などと上まで引上げてみると、まさに旅籠の中には人の姿がない。人の代りに平茸ひらたけがいつぱいつめこんである。顔を見合せていると、谷底から声がきこえて、その平茸をあけたら早く空籠を下してよこせ、まだか、おそいぞ、と言っている。そこで再び旅籠を下してやると、今度は重く、ようやく

引上げてみると、殿様は片手に縄をしつかとおさえてドツコイシヨと上つてきて、片手には平茸を三総ほどぶらさげている。いや驚いた、慌て馬のおかげでとんだ目にあうところだった、落ちるうちに木の枝と葉の繁みの中へはまりこんで手をだしたら初めの枝は折れてつかみ損ねたが、二本目、三本目にうまくひっかかって木の^{また}胯の上へうまいぐあいに乗つたのさ。それにしても平茸はいったい何事ですか。いや、それがさ、木の胯へうまいぐあいに乗つかつてみると、その木にいっぱい平茸が生えているのだ、見すてるわけに行かぬから手のとどくところはみんな取つて旅籠につめたが、手のとどかぬところにはまだいっぱい残っている。旅籠につめたのなどはまことにただの一部分で、い

やはや、何とも残念だ、実にどうもひどい損をしてきた、心残り
千万な、といまいましたがっている。郎党どもが笑つて、命が助か
つておまけにいくらかでも平茸をついでにとつて損などは、と
言うと、殿様が叱りつけて、馬鹿を言うものではないぞ、宝の山
へ這入つて空しく引上げる者があることか受領（国司）は至る所
に土をつかめと言うではないか、と言つたそうだ。

この話は昔から国司や地頭の貪慾を笑う材料に使われておつて、
今昔物語にも、このあと尚数行あり、郎党がこれに答えて、いか
にも御尤も、我々下素下郎げすげろうと違つてさすが国を司るほどの御方は
命の大事の時にも慌あわてず騒がず、こうして物をつかんでいらつし
やる、と言つておだてながら皮肉る言葉がつけたしてあるのだ。

地頭は到るところの土をつかめ、というのは愛嬌のある表現だが、この国司も愛嬌がある。今昔物語の作者の批判はつまり農民の側からの批判であり諷刺ふうしであろうが、農民自身が自分の姿にこれだけの風刺と愛嬌を添え得ていないのが残念だ。地頭は到るところの土をつかめ、という精神でしぼりとられては農民も笑ってすますわけに行かないが、地頭の方がこうなら、それに対する農民ももとよりそれに対するだけの土をつかむことを忘れてはいないので、当然の供出に対する不平だの隠匿米だのということはある。つまり昔の本に書かれていないが、これは昔の本の観点が狂っているからで、今の農村に行われていることが昔なかつた筈はない。農民の歴史はたしかに悲惨な歴史で、今日のように甘やかされ

たことはなく、悲しい上にも悲しく虐げられてきたのだが、その代り、つけ上らせればいくらでもつけ上る、なぜなら自己反省がなく、自主的に考えたり責任をとる態度が欠けているからで、つまりはそれが農民の類い稀な悲しい定めに対するたくまざる反逆報復の方法でもあったのだらう。なんでも先さきさま様次第運命を甘受して、虐げられれば虐げられたように、甘やかされれば甘やかされたで、どっちも底なし、いつでも満ち足りず不平であり、自分は悪くなく、人だけが悪いのである。

これは一つは土のせいだ。土は我々の原稿用紙のようにかげがえのある物ではないので、世界の大地がどれほど広くても、農民の大地は自分の耕す寸土すんどだけで、喜びも悲しみもただこの寸土と

だけ一緒なのだ。ただこの寸土とそれをめぐる関係以上に精神がとどかないので、人間だか、土の虫だか、分らぬような奇妙な生活感情からぬけだせない。土地の私有がなくならぬ限り、農村の魂は人間よりも土の虫に近いものから脱けだすことは出来ないようだ。

農村には今でも狸や狐が人をばかしたり、河童もいるし、それどころか、我々の世界にはすでに地頭はいないけれども、農村にだけはまだ例の到るところの土をつかむ地頭も死なずにいる。だから、私がこれから一つの昔むかし ばなし 嚟をつけ加えても、現代に通じていないことはない。農村は昔のまままだ。それは土が昔のまままで、その土を所有しているからである。だから、この嚟は土の中から

生れた噺なのだが、それなら、農民が土を私有しなくなったらこんな噺はなくなるかというところ、然し、農民が土を私有しなくなる、ところが、困ったことに、農民が土の怨おんりょう霊から脱けだす時がきても、人間という奴が、死んだあとでは土の中へうめられて土に還ってしまうので、どうも、これは、困った因縁だ。結局、話人間ということになっては、私の屁理窟やおしゃべりはもう及びもつかない。とにかく私は予定通り、土の中から生れて来た小さな話を書きたしておこう。

昔々あるところに（紀州名草郡桜村などという人がある）物部

磨という百姓があつた。ほかにとりたてて悪いところはないのだけれども、酒が好きだ。それから、女が好きだ。そして、あんまり働くことが好きでない。そのうちに、よその後家で桜大娘という女の子と懇ねんごろになり、相思相愛で、婚礼をあげようということになつたが、何がさて磨は怠け者で余分のたくわえがないから酒が買えない。せつかくの婚礼だからせめて酒でも村の連中にふるまいたいがあいにくで、と女にそれとなくもちかけたのは、女は後家でいくらか握っているだろうという考えからだ、それは困つたねえ、でも、いいことがあるよ、隣の三上村の薬王寺では飲みきれないほど酒があるということだから借りておいでな。なに、働いて、あとで返せばいいのだから。なるほど、お寺なら慈悲じひが

あるから頼めば貸してくれるだろう、と早速でかけてかけあつてみると、よかろう、その代り利息は倍にして返すのだよ、と二斗の酒をかしてくれた。

とどこおりなく婚礼がすんだが、磨の働きでは二斗の酒が返せない。お寺から催促のたびになんとかごまかして年月を経ているうちに病気になつて寝こんでしまった。このへんで医者といえれば薬王寺の坊主の薬のやつかいにならねばならぬから、女房がでかけて行って頼みこんで坊さんに往診して貰う。坊さんが来てみると、ひどい重病で、とても助かる見込みがない。今日か明日かという容態であつた。

「これはとても駄目だ。もう薬をあげたところで、どうなるもの

でもない。定命じょうみんは仕方のないものだから、心静かに往生をとげるがよい。それに就ては、お前さんの婚礼に二斗のお酒が貸してあつたが、あれを返さずに死なれては困る。さればといつて、見廻したところお前さんのところにはカタにとるような品物もないが、それでは仕方がないから、死んでから牛に生れ變つておいで」

「なんで牛に生れなければなりませんか」

「それは申すまでもない。この容態ではとてもこの世で酒が返せないのだから、牛に生れ變つてきて、八年間働かねばなりませんぞ。それはちゃんとお釈迦しやくさま様が経文に説いておいでになることで、物をかりて返せないうちに死ぬ時は、牛に生れてきて八年間

働かねばならぬと申されてある」

「たった二斗の酒ぐらいに、牛に生れて八年というのはむごいことでございます。どうか、ごかんべん下さいまして」

「いやいや。飛んでもないことを仰有るものではない。ちゃんと経文にあることだから、仕方がないと思わつしやい。それとも地獄へ落ちて火に焼かれ氷につけられる方がよろしいかの。八年ぐらいは夢のうちにはすぎしてしまう。経文にあることだから、牛になつて八年間は働いてもらわねばならぬ」

「お前さん経文にあることだから仕方がないよ。元々お前さんがだらしがなくて返せなかったのだから、牛に生れ変つて返さなければいけないよ」

「そうか。なんとという情ないことだろう。こんなことになるぐらいなら、もつと早く働いて返せばよかつた」

男はハラハラと涙を流して悲しんだが、仕方がない。その晩、息をひきとつた。

翌朝になつて小坊主が門前を掃はきにくると牛が一匹しよんぼりしている。別に縄につながれてもいないのに、お寺の門前にしよんぼりして動かないから和尚に告げた。ああ、そうか、よしよし、それではゆうべ死んだものとみえる。それはウチの牛だから今日から野良に使うがよい。オヤ、そうですか。和尚さまが買っておいでになりましたのですか。マア、そうじゃ。どれ、ひとつ、見てやろう、と門前へ出てみると、大変大きなおとなしそうな赤牛

だから、うむ、これなら申分なからう、野良へつれてゆきなさい、と寺男をよんで引渡した。

ところが、この寺男がなんとも牛使いの荒っぽい男で、すこし怠けても情け容赦なくピシピシ打つ。山へ行けば背へつめるだけの木をつませて、それで疲れてちよつと立止つただけでも大きな丸太で力一ぱいブンなぐる。ゆつくり草もたべさせず、縄をつかんで鼻をぐいぐいねじりまわして引廻すものだから、辛いこと悲しいこと、それでも五年間は辛抱した。そして、とうとう、たまらなくなつてしまった。

その晩から、和尚は毎晩のように、夢の中で必ず牛に蹴とばされる。どうやらスヤスヤ寝ついたと思うと、どこからともなく牛

がニューとでてくるのだが、ニューとでてくる、アツと思うともうダメなので、逃げるに逃げられず追いつめられて、そのときキンタマをいやというほど蹴とばされるのである。その痛いこと、全身ただ脂の汗、天地くらむ、ムムム……蹴られぬさきに蹴られる場所も痛さも分るその瞬間の絶望がなんともつらい。

これが毎晩々々のことだ。和尚もいまいまして仕方がない。夢のことだから別にキンタマが腫れあがりもしないけれども、憎らしいことだから、ある日牛を見に野良へでると、牛は寺男にひき廻されておとなしく働いており、和尚を認めると、急にしゃくりあげてポロポロと泣きだした。それが如何にも悲しげに気の毒な様子であるから、和尚も不愜ふびんになって、まだ三年あるのに、も

つたいないことだと思つたが、毎晩キンタマを蹴られるのも迷惑な話だから、まア、このへんで勘弁してやるのも功德くどくというものでらう、と考へた。

「まだ三年もあるのだが、見れば涙など流して不愼な様子だから、特別に慈悲をしてやろう。こんな慈悲というものは、よくよく果報な者でないと受けられるものではないが、それというのもお前の運がよかつたのだから、幸せを忘れぬがよい。さア、好きなどころへ行くがよい」

と、さとして許しを与えてやると、牛は大變よろこんだ様子で、どこともなく行ってしまった。それからもうこの牛を見かけた者がない。

ある日のこと和尚が用たしにでて隣村を通ると、牛になった男の女房だった女が川で洗濯しているのを見かけた。この女は男が死ぬと何日もたたないうちに別の男のところへお嫁に行つて暮しており、今しも男のフンドシを洗濯している。

「やア、相変らず御精がでるな、いつも達者で、めでたい」と、和尚は川の流れのふちに立止つて、女に話しかけた。

「オヤ、和尚さん。こんにちは。いつも和尚さんは顔のツヤがいいね」

「ウム、お互いに、まア、達者でしあわせというものだ。ところで、つかぬことを訊くようだが、お前さんはこの一月ほど、牛がでて、そのなんだな、蹴とばされるような夢をみなかつたかな」

「なんの話だね。藪から棒に。和尚さんは人をからかっているよ」
「いや、なに、ただ、牛の夢にうなされたことがないかというのだよ」

「そんなおかしい夢を見る者があるものかね。ほんとに意地の悪いいたずら者だよ、和尚さんは」

女は馬鹿みたいにアハアハアと笑った。和尚はてれて、ひきさがってきた。

(初出誌不詳)

青空文庫情報

底本：「桜の森の満開の下」講談社文芸文庫、講談社

1989（平成1）年4月10日発行

2004（平成16）年12月3日第34刷

底本の親本：「坂口安吾選集第六卷」講談社

1982（昭和57）年5月発行

入力：田中敬三

校正：noriko saito

2006年7月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

土の中からの話

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>